

表象文化論学会（仮称）設立準備大会プログラム

2005年11月19日（土）－ 20日（日）東京大学駒場キャンパス

問合せ先／東京大学大学院 総合文化研究科 表象文化論研究室
〒153-8902 東京都目黒区駒場 3-8-1
repre@repre.org
<http://www.repre.org>

主催／東京大学大学院 総合文化研究科 表象文化論研究室
共催／東京大学大学院 総合文化研究科 共生のための国際哲学交流センター (UTCP)

11月19日（土）18号館ホール

15:00—15:30 開会の言葉 渡邊守章（演出家・東京大学名誉教授）

渡邊守章（わたなべ もりあき）

1933年東京都生まれ。演出家・東京大学名誉教授。放送大学元副学長。専攻は表象文化論・フランス文学。著書に『ポール・クローデル—劇的想像力の世界』（中央公論社）、『虚構の身体』（中央公論社）、『表象文化研究』（共著、放送大学教育振興会）。訳書にM.フーコー『性の歴史Ⅰ—知への意志』（新潮社）、『ステファヌ・マラルメ全集』（筑摩書房）、クローデル『繻子の靴』（岩波文庫）。演出作品にラシーヌ『悲劇フェードル』（昭和61年芸術祭優秀作品賞）、ジュネ『女中たち』（平成7年読売演劇賞優秀作品賞）。1997年、演劇制作『空中庭園』設立。泉鏡花『天守物語』、ジュネ『バルコン』の演出、創作能『内濠十二景あるいは《二重の影》』『薔薇の名—長谷寺の牡丹』の作・演出。パリを始め海外公演も積極的に行っている。

15:30—18:30 シンポジウム「閉塞する人文科学を超えて—いま、芸術を問う」

岡崎乾二郎（美術家・近畿大学）

中沢新一（中央大学）

ファブリアーノ・ファブブリ（ボローニャ大学）

リピット水田堯（南カリフォルニア大学）

司会／田中純（東京大学）

表象文化論は、人文科学の単なる一ディシプリンではなく、既存の学問分野に浸透し、それらを内部から変質させてまったくあらたな知の光景を現出させる批判装置であること、さらに、大学での研究と社会での文化創造をダイナミックにリンクさせることを目標としてきた。世界的に人文科学が全体的な展望を失い、細分化されたジャンル内に閉塞しているように見える現在、この状況にそれはどんなかたちで介入し、「知」のあらたな活性化をおこなおうとするのか。芸術の分析を通して、創造行為の息吹へと大学と学問を開こうとするその企ては、いま、どのような可能性を見すえているのか。学会設立に向け、「表象文化論」の野心とその戦略・戦術を改めてこの場で問い、それをたたき台として、各分野で芸術・文化研究の先端を切り開いている国内外の思想家、芸術家、批評家、研究者により、芸術論を中心とした人文科学の現状をめぐる認識と、実際の制度的、方法的な取り組み、および将来的な課題について討議をおこないたい。

岡崎乾二郎（おかざき けんじろう）

1955年東京都生まれ。造形作家。現在、近畿大学国際人文科学研究所教授。第12回パリ・ビエンナーレ（パリ、1982年）、ユーロパリア'89現代日本美術展（アントワープ）、第9回インド・トリエンナーレ（ニューデリー、1997年）などの展覧会に出品。2000年、近自然公園『日回り舞台』。2002年、セゾン現代美術館で個展。同年、ヴェネツィア・ビエンナーレ第8回建築展日本館ディレクター。著書に『ルネサンス 経験の条件』（筑摩書房）など。

中沢新一（なかざわ しんいち）

1950年山梨県生まれ。思想家、宗教学者。現在、中央大学教授。来春、多摩美術大学芸術学科教授および同大学芸術人類学研究所所長に着任予定。著書に、『チベットのモーツァルト』（せりか書房、サントリー学芸賞）、『森のパロッド』（せりか書房、読売文学賞）、『フィロソフィア・ヤポニカ』（集英社、伊藤整文学賞）、『カイエ・ソバージュ全5巻』（『対称性人類学』で小林秀雄賞）、『精霊の王』、『アースダイバー』（以上、講談社）など多数。

ファブリアーノ・ファブブリ（Fabriano Fabbrì）

1971年イタリア生まれ。美学美術史およびコンテンツ文化融合論専攻。ボローニャ大学卒業後、2001年よりボローニャ大学文哲学部視聴覚芸術学科（DAMS）専任講師。本年11月より2ヶ月間東京大学大学院総合文化研究科（UTCP及び表象文化論）招聘客員研究員。著書に『二つの20世紀：20年代の芸術と文学』（マンニ、2003年）、『他者どもと疎外されたものども：大戦間における表現主義』（アラクネ、2004年）。論文に、『マッシモ・ボンテンペリのスーパーリアリズム』『ポエティケ』（1997年）など多数。

リピット水田堯（Akira Mizuta Lippit）

1964年米国コネチカット州ニューヘヴン生まれ。映画・視覚文化論、比較文学。サンフランシスコ州立大学、カリフォルニア大学アーヴァイン校などを経て、2005年より南カリフォルニア大学映画・テレビ研究科および比較文学・東アジア言語文化研究科教授。城西国際大学メディア学部客員教授。著書に『エレクトリック・アニマル—野生動物の修辭学にむけて』（ミネソタ大学出版）、『アメリカ研究とジェンダー』（共著、世界思想社）、近刊著に『アトミック・ライト（影の光学）』、『エクス・シネマ—実験映画試論』。論文に「世界の中で—日本映画という外部」（『InterCommunication』42号、2002）など多数。

11月20日（日）18号館4階コラボレーションルーム1～3

10:00－12:00 研究発表

研究発表パネルA「表象不可能なもの」の回帰——カタストロフ以後の暴力批判」

香川檀（武蔵大学）

多賀健太郎（大阪大学）

宮崎裕助（東京大学）

コメンテーター／田崎英明（立命館大学）

司会／中島隆博（東京大学）

〈表象不可能なもの〉をどのように表象するのか——「ポスト近代」を画す表象の問題とは、おそらくこのような問いに集約することができよう。20世紀以降のわれわれの時代は、この〈表象不可能なもの〉が二つの世界大戦、アウシュヴィッツ、ヒロシマを経て、9・11にいたるまで、さまざまなカタストロフとして絶えず回帰して止まない時代である。こうした〈表象不可能なもの〉は途方もない暴力でありながら、しかしなお、危機の証言として、死者の追悼として、記憶の芸術として、つねにわれわれに「表象すること」を課す。本パネルでは、〈表象不可能なもの〉が表象の限界において課す暴力の表象／表象の暴力を、暴力批判（ベンヤミン）の試みのうちに位置づけ、カタストロフにおける表象の問題について、新たなパースペクティヴを開こうとする。

香川檀「ドイツのホロコースト記念碑論争と〈対抗記念碑〉」

2005年5月、ベルリンにホロコースト中央記念碑が完成した。この記念施設をめぐるのは、90年代半ば以来、負の過去を想起するにふさわしい造形とはいかなるものかをめぐって論争が展開されてきた。本発表は、その論争を参照しつつ、現代アートが提案する「対抗記念碑」のレトリックを図像性、文字性、空間構成などの面から考察したうえで、そこから抽出される「対抗性」が、落成したピーター・アイゼンマンの記念碑デザインにも見出されることを明らかにする。

多賀健太郎「喪の証言性をめぐって——声・記憶・神話」

表象という語が再現や代理をも想起させる以上、表象をめぐる問いには不在や死の契機がたえず絡み合うことになる。カタストロフ以後における、表象不可能なものを表象しようとする要請を、声・記憶・神話のプロセスに沿って再検討し、死者の喪に服することと死者について証言することとのあいだに横たわる距たりとその交錯の両義性を浮き彫りにすることで、死を合理化・儀礼化しようとする身振りにひそむ暴力性を探る。

宮崎裕助「神的暴力と超表象の問題——デリダ、ナンシー、ベンヤミン」

ジャック・デリダの『法の力』（1990）は、ナチズムの「最終解決」が、近代の「神話的で表象的な暴力の極限点」を指し示すことで、逆説的にも、ベンヤミンが神話的暴力と対置していた「神的暴力」の窮極的な顕現に酷似してくるというアポリアを指摘している。本発表は、この問題提起から出発することで、近年ジャン＝リュック・ナンシーが提唱した「超表象」の概念（『禁じられた表象』2001）との関連を探りながら、現代思想が「アウシュヴィッツへの問い」として切り拓いた共通の問題系を解明しようと試みる。

コメンテーター／田崎英明（たざきひであき）

1960年東京生まれ。政治理論、セクシュアリティ理論。立命館大学非常勤講師。2006年より立教大学現代心理学研究科映像身体学科着任予定。著書に『夢の労働 労働の夢——フランス初期社会主義の経験』（青弓社）、『ジェンダー／セクシュアリティ』（岩波書店）、共著に『現代社会学への誘い』（朝日新聞社）、『20世紀の定義8』（岩波書店）、『カラヴァッジョ鑑』（人文書院）、『歴史とは何か』（河出書房新社）、『売る身体／買う身体』（青弓社）など。

研究発表パネルB「ネゴシエーションズ——イメージとその外部」

加治屋健司（スミソニアンアメリカ美術館）

近藤學（ハーヴァード大学）

堀潤之（関西大学）

コメンテーター／林道郎（上智大学）

司会／松岡新一郎（国立音楽大学）

芸術は真空の中で作られるのではない。作品であれ、批評であれ、そこには社会や歴史など、そのコンテキストが消しがたく刻み込まれている。従来、コンテキストから芸術への一方向的な影響として捉えられがちだった両者の関係であるが、本パネルでは、個別の諸事例を可能なかぎり精密に検討することから出発し、それらがどのような形で社会や歴史といったコンテキストと関わるのかを、イメージそれ自体が持つ構造と論理の水準において明らかにすることを試みる。イメージが、そのコンテキストによって重層的に決定されるのみならず、むしろ、能動的なやり方でそれと駆け引き（ネゴシエーション）をおこなって作品を編制していくメカニズムを、映画、美術、批評といった多様な表象文化を取り上げながら考察し、イメージとその外部の関係を議論するさいの理論的なオルターナティブの提唱を目指す。

加治屋健司「誰が芸術の自律を恐れるのか——ベイトソン、ルーマン、グリーンバーグ」

20世紀アメリカを代表する美術批評家のクレメント・グリーンバーグ（1909–94）のモダニズムとフォーマリズムは、1970年代以降、様々な芸術家や批評家、研究者の批判の対象となった。本発表は、とりわけ社会史的な研究の再検討に焦点を当て、グレゴリー・ベイトソン（1904–80）やニクラス・ルーマン（1927–98）の議論を参照しつつ、芸術の自律性を始めとするグリーンバーグの議論の再定式化を試みる。芸術の社会性に関して、従来の社会史的な方法に代わるアプローチを社会システム論的な立場から検討したい。

近藤學「ウィレム・デ・クーニングの「アーカイヴ」——制作プロセスの記録と時間の政治学」

戦後アメリカ美術を代表する画家の一人ウィレム・デ・クーニング（1904–97）は、その長い生涯を通じ、自らの制作の諸段階を、さまざまな手段を用いて執拗なまでに記録・保存・再利用していた。本発表ではこの「アーカイヴ」構築に注目し、〈生産行為の時間性〉という視点から考察を加える。一見するとごく私的で風変わりなデ・クーニングの実践が、じっさいには広範な文化的含意を備えたものであったことを指摘しつつ、芸術と社会の複雑な関わり合いの一端を示してみたい。

堀潤之「ゴダールと歴史のモンタージュ」

ジャン＝リュック・ゴダール（1930–）は『映画史』（1988–98）で、映像と現実、とりわけ映像と二十世紀の歴史が取り持つ関係を独自の観点から考察している。本発表では、『映画史』に顕著な「歴史のモンタージュ」と名付けうる歴史叙述の手法が、五月革命時に撮られた匿名的なシネトラクトから最新作『アワーミュージック』*Notre Musique*に至る作品群でどのように変奏されているかをたどることを通じて、この手法の方法論的な可能性を探ってみたい。

コメンテーター／林道郎（はやし みちろう）

1959年北海道生まれ。美術史家、美術批評家。コロンビア大学大学院美術史学科博士号。現在、上智大学比較文化学部助教授。著書に『絵画は二度死ぬ、あるいは死なない 全7巻』（ART TRACEより刊行中）。論文に『縁に立てられた絵 『二箇所』の余白に』（『二箇所 絵画場から絵画衝動へ 中西夏之』展）、『零度の絵画 RRの吹き』（『ロバート・ライマン 至福の絵画』展）、『光跡に目を澄まして 宮本隆司論』（『宮本隆司写真展』）など。訳書にE・ディ・アントニオ、M・タックマン『現代美術は語る』（青土社）。

研究発表パネルC「近代の上演」

新田啓子（一橋大学）

森山直人（京都造形芸術大学）

吉田寛（国立音楽大学）

コメンテーター／尼ヶ崎彬（学習院女子大学）

司会／内野儀（東京大学）

本パネルは、〈上演〉という観点を通じてモダニティを再考する試みである。セジウィックらが論じたように、「パフォーマンス」と「パフォーマティブ」の概念は、理論的出自を異にしつつも、両者がともに内包する反復性の契機によって本質的に結びついていると見なすことができる。私たちは、こうしたパフォーマンス／パフォーマティブの両次元を含む概念をひとまず〈上演〉と呼び、これによって、狭義の上演芸術のみならず、近代における文化表象一般に内包される上演性の契機を問題化したい。そこでは、近代特有の「文化の政治」、とりわけ、性・人種・ナショナリティといったアイデンティティ・カテゴリーの構築における〈上演〉の作用が共通して問われることになるだろう。〈上演〉という包括的な枠組みのもと、領域横断的な討議の場を成立させ、モダニティと文化をめぐる研究の新たな展開の可能性を示すことが、本パネルの目標である。

新田啓子「モダニズムとcolor struck——黒人女性表象の常套化を辿って」

本発表では、20世紀前半に特筆すべき活動を記した女優／大衆（劇）作家 Mae West を中心に、そして彼女の周辺にいた表現者たち——Bert Williams, Zora Neale Hurston, Ethel Waters——の影響を踏まえつつ、黒人女性表象が常套化された経緯を考察する。この作業が辿るのは、テキストから演劇、そして映画へと展開する「上演」媒体の変遷に対応し、同じく特殊な変化を遂げた文化権力の現れを記すケースであるが、それはまた、ここで扱う1920、30年代の「混血表象」への不安をも明らかにする。

森山直人「〈アンガラ演劇〉を再考する——戦後日本演劇におけるバロック性をめぐって」

1960年代後半以降の〈アンガラ第一世代〉の活動が、戦後日本の現代演劇の歴史において最も豊かな一時期を形成したことは確かだが、モダニズム、ナショナリズム、フェミニズム等の議論の今日的な地平からみたとき、批判的に検討すべき余地が多く残されていることも確かである。本発表は、〈アンガラ〉の到達した地平を、ベンヤミン的な「バロック」の概念から検討することを通じて、「近代日本」という歴史的時空の演劇的表象＝上演空間の裂け目の再検証を目的とする。

吉田寛「可聴化されたネイション——音楽と《ドイツ的なもの》」

近代のドイツにおいて「ネイション」（あるいはfolk）は、音楽という聴覚的で非言語的な芸術を媒介にして想像された理念的構築物であった。ヨーロッパのなかの「遅れてきた国民」であったドイツが政治的、経済的、軍事的に自らを「先進国化」する過程で、かたや「音楽の国」というドイツの文化的表象が生まれたのは偶然ではなかった。しかし理念は常に「行き過ぎ」る。音楽がいかに「ドイツ的なもの」の理念を表象＝代弁し、なおかつその現実化を困難にしてきたのか、本発表ではそれをヴァーグナーを例にして考察する。

コメンテーター／尼ヶ崎彬（あまがさきあきら）

1947年愛媛県生まれ。学習院女子大学教授。東京大学文学部美学芸術学科卒業。同大学院修士課程修了。東京大学助手、学習院女子短期大学助教授・同教授を経て、1998年より現職。専門は、日本の美学とくに歌論、及び舞踊美学。舞踊評論の活動も行う。著書に『花鳥の使』（筑摩書房）、『芸術としての身体』（編書、勁草書房）、『日本のレトリック』（筑摩書房）、『ことばと身体』（勁草書房）、『メディアの現在』（編書、ペリかん社）、『緑の美学』（勁草書房）、『ダンス・クリティーク』（勁草書房）。

11月20日（日）18号館ホール

13:30—16:30 シンポジウム「表象のメディアーション——知の現場、現場の知」

古賀太（朝日新聞社文化事業部）

住友文彦（NTTインターコミュニケーション・センター）

常石史子（東京国立近代美術館フィルムセンター）

三浦雅士（文芸評論家）

司会／佐藤良明（東京大学）

メディア環境や表現手段が急速に多様化し複雑化している現在、芸術表象もまた、偉大な天才の主観性による創造という単線的な文脈で理解するだけではもはや不十分である。すくなくとも、文化のなかで生産され、流通し、そして消費されるものとしての芸術という基本的な認識がなければ、芸術のアクチュアリティをつかまえることはできない。このことは、大学における芸術研究を「現場」に対して開いていくと同時に、アカデミックな知的生産の現場的な有用性について検証するという、相互的な作業を要求するだろう。そうした観点から、このシンポジウムでは、アート・マネージメントやキュレーションといった現場のさまざまな局面で活動する「メディアエーター」に大学での研究者を加えたハイブリッドなパネル構成により、現在の芸術表象をめぐる「知」と「現場」の関係について、その可能性と問題点を論じ合う。

古賀太（こがふとし）

1961年福岡県生まれ。国際交流基金勤務を経て、現在朝日新聞社文化事業部企画委員。主な企画として映画では、リュミエール、ルノワール、ホークス、ドライバー、ラングとムルナウなどの監督の特集上映や、レンフィルム、韓国映画などの歴史的回顧、イタリア、ポルトガル、ドイツなどの新作映画祭のほか、小津安二郎生誕百年シンポなど。『珈琲時光』などの映画製作投資も担当。展覧会では「ポンビドー・コレクション展」、「ナンシー派展」、「田中一光回顧展」など。訳書に『魔術師メリエス』。

住友文彦（すみとも ふみひこ）

1971年生まれ。東京大学大学院総合文化研究科表象文化論コース修了。金沢21世紀美術館建設事務局の学芸員を経て、現在ICC/NTTインターコミュニケーションセンター学芸員。「アウト・ザ・ウィンドウ」展（主催：国際交流基金アジアセンター、2004年）、「リアクティビティ」展（ICC）、「アート&テクノロジーの過去と未来」展（ICC）などを企画。共著に「身体の贈与」『表象のディスクール6 創造』（小林康夫・松浦寿輝編、東京大学出版会、2000年）、「映像の中へ」（共著『21世紀の出会い—共鳴、ここ・から』、金沢21世紀美術館、淡交社、2004年）など。NPO法人アーツイニシアティヴトウキョウの副ディレクターも務める。

常石史子（つねいし ふみこ）

1973年広島県生まれ。現在、東京国立近代美術館フィルムセンター研究員、京都造形芸術大学ほか非常勤講師。表象文化論博士課程在学中に「デジタル小津安二郎展」企画運営に参加。フィルムセンターでは主に日本映画の発掘・復元に携わる。論文に「盲者の視線」（東京大学出版会『表象のディスクール4 イメージ』所収）、「『斬人斬馬剣』その発見と復元」（『NFCニューズレター』46号）、「『発掘』の諸相一切られ、つなぐ」（同49号）、「デジタル復元、はじめの一步」（『映画テレビ技術』No.619、日本映画テレビ技術協会小倉・佐伯賞受賞）、「紗が降りる—成瀬巳喜男の中心」（筑摩書房『成瀬巳喜男の世界へ』所収）等。

三浦雅士（みうらまさし）

文芸評論家。1960年代末に『ユリイカ』創刊にたずさわり、以後80年代初頭まで『現代思想』編集長。90年代には新書館編集主幹として月刊『ダンスマガジン』および『大航海』を創刊、編集長をつとめながら、活発な著作活動を続けている。著書に『私という現象』『寺山修司—鏡のなかの言葉』『身体の零度』『批評という鬱』『バレエ入門』『出生の秘密』など多数。その他多くの対談書や案内書を通し、現代日本の知識の生産、流通、交流にユニークな貢献を果たしている。